

22

19世紀後半における漢方医の一考察： 温知社を中心に

浅井 皓平

従来の漢方医の研究では温知社や帝国医会などの医師団体の活動や浅田宗伯、浅井篤太郎（国幹）などの人物誌が注目されてきた。しかし、各医師団体の詳細な活動や地域の漢方医がどのような活動をしていたのかという点に注目をした研究は少ない。

本発表では温知社の研究で用いられてこなかった川越分社の新史料と埼玉県立文書館の史料を用いて、地域の漢方医がどのような活動をしていたのかを明らかにする。漢方から西洋医学に移り変わっていく過程の中で漢方医がどのような活動をして自分たちの役割を維持していたのだろうか。

本発表では温知社に焦点を絞り、報告をする。1点目は温知社地方分社の新史料の報告、2点目は温知社の解散についてである。

明治時代になると西洋医学が日本に導入され、漢方は排除される。その中で漢方医たちは1879年に温知社、1890年に帝国医会を結成した。温知社は山田業広を初代社首に、2代目は浅田宗伯、3代目に浅井篤太郎を置いて活動を展開する。温知社の活動は和漢医学講習所の設立と雑誌『温知医談』の発行が主であったが、温知社が設立してからの活動の中には地方分社の展開も挙げられる。地方分社は大阪や長野など様々な場所に設立をした。そのなかの1つに川越にも設けられた。その史料は杏雨書屋に所蔵されている。地方分社の史料では、川越地方分社の役職や規則、会費、会員の名前とその数、具体的な活動などが記載されている。

本発表ではそれだけではなく、埼玉県の温知社の会員はどのような活動をしていたのかにも注目をした。例えば、川越分社の仮講長だった利根川尚方は利根川塾という漢学塾兼寺子屋を開いていた人物の可能性が高い。また、埼玉県立文書館に所蔵されている一部の種痘証の種痘医が温知社の会員でもあった。

2点目は温知社が本当に解散していたのかをこれまでの史料をもとに再度検証をする。

温知社は1887年に解散したとされており、それは深川晨堂の『漢洋医学闘争史』「第8章温知社の解散」の中で論じられていた。現代の研究でも深川の説をもとにそのように考えられている。しかし、1887年以降も雑誌『温知医談』が発行されているので、解散といえるのか疑問が残る。

確かに1886年12月の『温知医談』の社報の中で温知社解散の話題が登場する。しかし、1887年2月に発行された『温知医談』の社報の中では解散ではなく、「原案第一條ヲ廃棄シ本社ハ移転、病院ハ閉チ二十三年迄維持スル事」と記載されている。また、浅井篤太郎が残した「古医方小史」では「二十年一月温知社全国社会総会ヲ開キ大ニ社事ヲ更草シ社名維持」と記載されている。このように解散ではなく維持という記載をされており、その他会費の面からも解散とは言い難い状態が生じている。

本発表では地方分社にまつわる史料で川越分社の実態を明らかにし、また埼玉県立文書館に所蔵されている史料を用いて、埼玉県と限定的ではあるが、温知社の会員であった医師たちの実態を明らかにした。温知社は漢方医を主体とした医師団体であるため、当時の漢方医たちがどのような活動をしていたのかを示す一例となりうるだろう。

また、温知社が本当に解散をしたのかについても再度検討をした。1890年は帝国医会が設立をした年でもある。従来の研究では温知社の解散と帝国医会の誕生という非連続的な解釈をしていたが、温知社と帝国医会の連続性を意識したとき、温知社とは異なる展開の仕方での医師免許を維持しようとした帝国医会の姿が浮かび上がってくるのである。